

## 哄笑には哄笑をという戦略と、笑いが可能にする内なる他者との対話 —ホーソーンの短編と現代日本小説の比較を通して—

中谷ひとみ\*

恐怖は、強度の違いはあるが、その定義や効果は明白だと言ってよい。「身の危険を回避するための基本的な情動のひとつであり、多くの動物に共通する」生き残りのための有効な手段だ。危険を察知すると瞬時に飛び退いたり、逃げたり、そうでなければ果敢に挑んだりもする。(斎藤45)<sup>1</sup>一方、「笑い」の効果については様々なことが知られている。「ハッハッハッ」と大きく笑えば、呼吸/有酸素運動が緊張緩和に役立つ。笑いの対象に注意を集中するため我を忘れることができ、現実の束縛から解放されたり、笑う前の陰鬱な自分を吹き飛ばして元気が出たり、ゆとりが生まれて本来の自分に戻ったり、新しい自分を構築したりできる。免疫力の向上、健康増進もあり、落語を聴いたり笑いヨガなども行われている。しかし、笑いとは何だろうか。可笑しさに対する感情的な反応などといった、恐怖のように簡潔な定義や説明が可能だろうか。もともと、恐怖とてそんなに単純なものではないかもしれないが、人は可笑しければ笑うとは限らない。気恥ずかしく思ったり、どうしようもないような窮地に陥ったり、どうしてよいかわからず途方にくれたり、絶望しても、笑う。「阪神大震災の際、自宅は無事かと帰ってみたら、あたり一面が崩れ落ちていて、なぜか笑ってしまったなどというエピソードが知られている。」(雨宮 160) 恐怖が多くの動物に共通する危険回避あるいは生き延びる手段であるのとは異なり、笑いの複雑さは人間特有のものだと言えるかもしれない。

笑いについては、ベルグソンやバフチンなど様々な言説があり<sup>2</sup>、文学や大衆文化でも喜劇やブラックユーモアやスラップスティックなど種々の「笑い」が論じられてきた。Nathaniel Hawthorne (1804-64) の短編には笑いが重要な要素となっているものがある。『おらおらでひとりいぐも』(2017)の主人公の老女も、夫の死後孤独に苛まれる日常を送っているとは言っても、よく笑う。しかし単に可笑的から笑うのではなさそうである。本論ではこれら文学作品を比較しながら笑いを考える。

### 1. ホーソーンと笑い

\* 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授

<sup>1</sup> 斎藤はRush Dozier Jr. 『恐怖一心の闇に棲む幽霊』(角川春樹事務所、1999)に言及しながら、「怖い」と「美しい」の親和的な要因の一つが、脳内麻薬物質のエンドルフィンを放出して快を感じさせる報酬系にあると推論している。

<sup>2</sup> 本論の考察に際して、笑い、笑いと、ホーソーンを含む文学に関しては雨宮、岡田、神奈川大学人文学研究所編、佐藤編、志水他、Duvignaud、成田他編、Berger, Bergson, Bakhtin, Martin, 山口監修、Reynoldsなどを参考にした。

ホーゾーンの短編小説には笑いがあふれているものがある。厳密には「笑い」ではないかもしれないが、一例を挙げよう。”Wakefield”（1835）の主人公は妻を裏切るような夫では決してないが、自分が世界の中心だと思い、自分がいなくなったら世界はどうなるか、妻はどうするのかみてみたいという欲望に取り憑かれ、ある日突然普段のように家を出たまま帰らない。密かに妻や世間を観察し続け、ようやく20年ぶりに、ぎこちない「いわくありげな笑み」（Nina Baym et al eds. 1220）を浮かべて妻の前に立つ。

The door opens. As he passes in, we have a parting glimpse of his visage, and recognize the crafty smile, which was the precursor of the joke, that he has ever since been playing off at his wife's expense. (1220;本論では下線はすべて筆者)

ようやく帰宅した身勝手な夫は、妻に対してどんな態度をとってよいのか、何を言ってよいのか分からないのだろう。この「いわくありげな笑み」は理解できる。気恥ずかしさ (bashfulness) あるいは照れ笑い (embarrassment or embarrassed grin) であろう。しかし他の短編には、その笑いがグロテスクだったり、奇妙で理解が困難だったりするものもあるが、小説を理解する上で重要な要素となっているため、見過ごせない。議論の俎上に載せたいのは“My Kinsman, Major Molineux”（1832）、“Young Goodman Brown”（1835）、“Ethan Brand”（1850）である。

### 1-1. 「僕の親戚モリノー少佐」—若者は笑って旧勢力打倒劇の観客となる

夜の9時ごろ、頭の回転が速いと自他ともに認め、抜け目なく、有力な親戚を後ろ盾に一旗上げようと田舎から出てきた18歳のRobinが船着き場に降り立つ。18世紀の初め、「とあるニューイングランド植民地の小さな首都」（Baym et al eds. 1174）でのことである。しかし親戚であるモリノー少佐の住所を尋ねても、無作法な哄笑や爆笑を浴びせられ、侮蔑的な目つきで睨まれ、お尋ね者とまで疑われる始末だ。それでも、野心と自信にあふれる若者は「船頭に道を聞いておけばよかった。そうしたら間違いなく道案内を務めてくれただろうに」と後悔はするものの、「こんな卑しいあばら家が僕の縁者の住居のはずがない」などと、彼なりに事態を論理的に解釈しようとする。自分の判断力に間違いはないと固く信じ、謎に直面しても、それを冷静に合理主義的に解釈しようとする。しかし、故郷と温かい家族との生活と敬虔な生活から人生の荒海に漕ぎ出した彼に、都会・新世界でのイニシエーションが準備したのは、まず彼の自尊心と合理性への信念を打ち砕くことであった。そして最後に用意されるのが、旧世界の権力に属し、彼が頼みとする少佐が群衆にリンチされ、目の前を通りすぎるクライマックスである。タールを塗り羽をまぶされる古典的なリンチ方法である。少佐は大柄で威風堂々たる体格の年配者で、不動の精神力の持ち主であることは推測できるが、顔は死人以上に蒼白で、苦悩に引き攣れている。自分のみじめな姿を、そして自分のこの上ない恥辱をロビンに目撃されていることを知り、それまで辛うじて維持してきた彼のプライドも瓦解する。

この短編はアメリカ独立革命直前の New England のある地方都市を舞台にしていることから、作者ホーソーンのアメリカの歴史への関心や、父性を意識していたことが色濃く反映されていることは確かであろう。(成田 他編 31-32、235参考)しかし主人公は、少佐の住所を尋ねた時は “ill-mannered roar of laughter from the barber’s shop” (1175) を、冷笑された直後には “a general laugh” (1177) を浴びる。夜警と出会い住所を訊くも無視された時には “drowsy laughter” (1179) が聞こえたような気がし、遠くからは “a wild and confused laughter” (1183) の声をする。嘲笑、哄笑、侮辱の笑い、無遠慮な爆笑、邪悪あるいはコケティッシュな含み笑いなど、主人公が笑われる姿を容易に思い描くことができる。テキストは聴覚/視覚的そして劇的であるが、酒本も指摘するように「こうまで律儀に書きこんであれば、作者が笑いに特定の役割を担わせているのではないかと、ごく自然な推測として思えてくる。」(35)

クライマックスで、リンチされて町を引き回されるモリノー少佐と無言で見つめあったロビンは「憐憫と恐怖の入り混じった」感情に襲われるが、すぐに「わけのわからない興奮」(1185) が彼をとらえる。

Soon, however, a bewildering excitement began to seize him upon his mind; the preceding adventures of the night, the unexpected appearance of the crowd, the torches, the confused din, and the hush that followed, the spectre of his kinsman reviled by that great multitude, all this, and more than all, a perception of tremendous ridicule in the whole scene, affected him with a sort of mental inebriety. At that moment a voice of sluggish merriment saluted Robin’s ears; he turned instinctively, and just behind the corner of the church stood the lantern-bearer, rubbing his eyes, and drowsily enjoying the lad’s amazement. Then he heard a peal of *laughter* like the ringing of silvery bells; a woman twitched his arm, a saucy eye met his, and he saw the lady of the scarlet petticoat. A sharp, dry cachinnation appealed to his memory, and, standing on tiptoe in the crowd, with his white apron over his head, he beheld the courteous little innkeeper. And lastly, there sailed over the heads of the multitude a great, broad laugh, broken in the midst by two deep sepulchral hems; thus—

“Haw, haw, haw—hem, hem—haw, haw, haw, haw!” (1185)

この晩出会った老市民、床屋、旅籠の主人や客たち、そして自分を冷笑する人たちの声やひそひそ話や笑い声を、ロビンは聞いたような気がする。そして彼らがつい先ほど自分を笑ったように、そして今も笑っているように、彼自身も笑う。しかし、誰よりも大きな声で笑う。

The contagion was spreading among the multitude, when, all at once, it seized upon Robin, and he set forth a shout of laughter that echoed through the street;

every man shook his sides, every man emptied his lungs, but Robin's shout was the loudest there. (1185)

「笑いの伝染病」のせいで主人公も笑ったと三人称の語り手は語る。リンチする群衆の笑い声が呼び水となり、主人公は皆と同様に腹をよじらせ、腹の底から笑っているようである。しかし、なぜ主人公は「誰よりも大きな声で笑った」(1185)のか。そのことに必然的な理由があるのか。本当に可笑しかったからだろうか。「カタルシス的な笑い」(Martin 107)であろうか。

単に、同情はもはや感じず、「笑いの伝染病」のせいもあって、リンチされて通りを引き回される元権威・権力者の姿が可笑しかったのではあるまい。自分がこのような人物を頼みに都会に出てきたことの愚かしさに気付いての自嘲的な笑いでもあるまい。リンチされる理由や事件の真实性/虚構性や歴史的背景などについての明確な説明は小説中はないが、群衆にこれほどまでに罰せられ、蔑まれている少佐を、彼も共に侮蔑しているのではあるまい。なにか可笑しいものに対する自然な反応というよりは、ロビンが誰よりも大きな声で笑わなければならなかったことに注意したい。暴徒の叫びや嘲笑、その声やリズムには精神的な酩酊状態を作り出す力がある。その力はまた、床屋の主人や客たちの嘲りの笑いや銀の鈴のような甲高い娼婦の笑い声など、直前までに主人公が経験した侮蔑的笑いを次々に記憶のなかから召喚し、笑いの交響曲のクレッシェンドから大団円へと導く。笑いには同調圧力があり、笑わない人を排除して同じ価値観を持つ集団を形成/強化することがある。ヒットラーの演説を聞いてその声や抑揚やリズムに酔ったドイツ国民が第二次世界大戦やユダヤ人迫害に突き進んだことを思い出さねばならない。ロビンは暴徒の叫びや笑い声を消し去るほどの大きな声で笑わねばならなかった。そうすることで無意識に自己防衛を図ったのである。これは彼が傍らの石に必死にしがみつきのながら行列が通り過ぎるのを待っていたことから推測できる。石にしがみついていたのは、単なる恐怖心からではなからう。理由もわからずに暴徒と共に叫び、少佐を嘲笑うことを本能的に拒否したのだ。「どこかの息絶えた国王—もう権力は失っても苦しみに歪んだ顔になお威厳を示す国王—の周りに群がり集まって嘲る悪鬼のように」、「偽りの華やかさを装い、愚かに騒ぎ立て、狂ったように哄笑しながら進む」(1185) 群衆には加わらなかった。誰よりも大きな声で笑ったのは、「笑いの伝染病」に罹患して暴徒の狂気に感染することを免れる無意識の自己防衛だったのだ。

こうして都会という新世界で成功を目論む田舎出の若者は、辛うじて都会の群衆の誘惑—その象徴が様々な人々による執拗な哄笑である—から、暴徒という悪魔の哄笑・嘲笑・挑発から、逃れることができた。彼には自らそうできる力があったからだが、それ以上に、彼には導き手がいたことに注意しなければならない。町に到着した主人公にずっと寄り添っていた壮年の紳士を思い出そう。「率直で知的、そして明るく、魅力的」(1182)な紳士で、主人公に寄り添う。大衆のように彼を嘲笑することも、下品な物言いをしたり、横柄な態度をとることもない。笑ったりは決してせず、穏やかに微笑むのみである。遠くから聞こえる声や音—実はリンチの行列の音—に気がついて

「ずいぶんあちらは楽しそうだから、我々も行って加わろうではありませんか」と提案する主人公を引き止め、「君は僕らがここで君の縁者を待たねばならないことを忘れてるね」（1183）と論ず。無法な世界に入ること、怒りに燃えて旧体制側の元権力者をリンチする暴徒の少数の中心人物とその周りの多くの日和見主義者たちに加わらないよう、慎重に寄り添い、そして真実—旧権力を倒して暴徒化する群衆というアメリカ史上、いやどこにでも、そしていつの時代でも見られる一場面—を直視することから注意を逸らさせない。暴徒に盲目的にコミットしないよう、暗に忠告するのだ。暴徒が去った後の静寂の中でポカンとしている主人公に「おいおい、ロビン君、夢を見ているのかい」（1185）と言って、主人公を現実に戻すのも彼である。そして波止場に戻る道を教えてほしいという主人公に対して、「少なくとも今晚はだめだ。数日たってもまだここから出発したいなら、急いで旅立たせてあげよう。ここに残りたいと思うなら、君は頭の回転が速いから、親戚のモリノー少佐の助けなしでも出世できるかもしれないよ」（1186）と言う。冷却期間を置いて、慎重にこれからの人生のことを考えるように促すのである。

この導き手のおかげで「僕の親戚モリノー少佐」の主人公は、実際のアメリカ史上のエピソードを題材とする旧勢力転覆劇の演者に加わることなく、観客でいることができた。旧勢力を象徴する少佐を侮辱しリンチする暴徒の嘲笑に対して、誰よりも大きな声で笑ってそれに打ち勝つことにより、共同体の反権力や揶揄・嘲笑に盲目的に加わることなく、自我と主体性とその後の彼の人生を保持できたのだ。誰よりも大きな声で笑うロビンの声と音の繰り返しとリズムが、他者・群衆・世界のそれまでの言説と意味構造を内破/炸裂させ、同時にロビンの主体の流動化をもたらし、新しい主体形成の契機となったと考えてよかろう。反体制の暴徒はますます凶暴になるだろうが、彼は自己を把持してこれからは主体的に生きることもできるだろう。小説はこの可能性と共に終わるが、導師なしではこのことは不可能だったろうし、将来もこのような存在は望まれる。

## 1-2. 「若きグッドマン・ブラウン」—絶望の果ての笑いも救済には役立たず

「若きグッドマン・ブラウン」の主人公は、新妻の哀願にもかかわらず、躊躇しながらも一年のうちでこの日こそ、「契約」（1200）どおりに森へ出かける。「契約」についての詳細な説明はないが、森では聖職者や政治家、彼が日頃から敬虔で善良だと信じて疑わなかった共同体の中心人物はじめ様々な隣人たち、そして貞淑で評判も良い女性たちも参加して、黒ミサが開かれようとしている。聖書でアダムとイヴを誘惑した蛇を想起させるような蛇状の杖を持つ、道連れとなった男に「私は君の父親や祖父の親友で、何度も共にこの同じ旅をして、真夜中過ぎに乱痴気騒ぎをしながら帰ってきたものだ」（1200）と言われるが、主人公は自分が敬虔なキリスト教徒の農民の家系であると信じているため、彼の言葉を容易には信じられない。あまりに頑なにこの事実を受け入れないため、それまで友好的で厳粛に聞いていたこの年輩の男は「抑えきれぬようにどっと笑いだし、腹を抱えて笑いこける。」（1201）主人公は自分をあざ笑う同様の嘲笑を、老女 goody Cloyse

の「けたけた笑い（“cackling aloud”，1202）」などでも体験することになる。「風も彼を侮り笑う。」（1204）しかし「上には摂理の天があり、下には信仰（Faith）がある限り、自分は断固として悪魔に抵抗してみせる」（1203）と自らに対して強く叫びながらろうじて自己を維持してきた主人公も「今夜はみめ麗しい女が一人、この聖体拝領の秘儀（“communion”）に臨む」（1203）と聞き、妻 Faith の髪飾りのリボンを認め、心乱れる。疑惑に苛まれ、怒り、そして恐怖する。

「若きグッドマン・ブラウン」はホーソーンに特徴的なテーマである人間の心の闇、人類に対する絶望、自己イメージの喪失とその再構築の必要性、他者に対する信頼、共同体などをめぐる典型的な文学テキストの一つであると言ってよかろう。しかし、それにしても、「僕の親戚モリノー少佐」同様、笑が多い。人々のみならず風も森も、主人公が悪を受け入れないことを嘲笑しているように主人公には聞こえる。そして、妻もこの黒ミサに参加していたことを知り、彼は「絶望の果て、気も狂わんばかりになって、わめき、叫び、笑う鬼と化す（“laughed loud and long”）」（1204）邪悪さとは無縁であると信じていた妻も、犯罪者やふしだら女と同様にその性質を分かち持つことを主人公は知り、「地上に善などはない、すべては悪魔の支配下にある」（1204）と叫ぶのだが、我々が注目しなければならないのは、絶望のさなかでも彼が笑おうとすることだ。

‘My Faith is gone!’ cried he, after one stupefied moment. ‘There is no good on earth; and sin is but a name. Come, devil! for to thee is this world given.’

And maddened with despair, so that he laughed loud and long, did goodman Brown grasp his staff and set forth again, at such a rate, that he seemed to fly along the forest-path, rather than to walk or run...

‘Ha! ha! ha!’ roared goodman Brown, when the wind laughed at him. ‘Let us hear which will laugh loudest!...

In truth, all through the haunted forest, there could be nothing more frightful than the figure of goodman Brown. On he flew, among the black pines, brandishing his staff with frenzied gestures, now giving vent to an inspiration of horrid blasphemy, and now shouting forth such laughter, as set all the echoes of the forest laughing like demons around him. (1204)

森での一連の出来事は、主人公が面と向かった時の人々の嘲笑や、遠くから聞こえる笑い声や、自然の嘲り声—たとえば風が自分を嘲っているように主人公には聞こえる—を背景にして進むが、この短編でも「嘆き、怒り、恐れ<sup>ごうぶく</sup>の叫びをあげる」（1204）主人公が、他者や自然の嘲りに打ち勝つように、あたかも降伏してそれを聞こえなくするために、より大きい声で笑おうとする。「僕の親戚モリノー少佐」のロビンと同様に、ブラウン青年も、悪を認めるよう促されるがなかなかそれが

できない自分を誇る共同体の人々の笑い声を消去/減殺して自己防衛する必要があったのだ。意識的で必死な彼の笑いは、悲しい無意識の自己防衛反応である。

森での聖体拝領の儀式を司る暗い人影が「我が子らよ、皆はこの若さにて、皆の性<sup>さが</sup>、皆の運命を發見したのです」（1206）と言い、人間の邪悪さが暴露される。幼少の頃より崇めてきた聖者たちや汚点一つないと信じていた共同体の人々の秘密、本当の姿が露呈する。教会の長老たちが小間使いの処女たちに向かって淫らな言葉を吐く。邪魔な夫を毒殺などして、後の人生を思うままに生きる妻がいる。若者が遺産欲しさに父親を殺害する。美しき乙女が自分の生んだ幼児を殺す。こうして結婚3か月にして、青年主人公は歓楽の罪、特に邪まな情欲の罪を暴露される。ストーリーは身近な内容で、性にまつわる問題という点で一貫性がある。この短編のテーマが性のイニシエーションであるという考えも納得できる。しかも、それらの罪を皆が互いにかぎ分けることができるようであり、このことを知ることが限らない飲みであるのが人間性の真実なら、人間の邪悪さも極まる。今こそ、欺瞞の夢から覚め、「悪こそが人類の本性であること、悪こそが人類の幸福であること」（1206）を知るべきだと、主人公は悪魔に挑発される。彼は敬虔な家系に生まれ、信仰心の篤い人々のなかで育ち、自分が善悪の二元論の善側にいると信じて疑わなかった。ゆえに、それまでの二元論的言説の異なる極一人間だれもが持つ根源的な悪一が真実であるといわれても、容易に信じることができなかつたのは当然であろう。

物語が森で見た主人公の夢であれ現実の出来事であれ、この一夜の出来事後、彼の人格も生活も、それまでとは一変する。彼は「厳めしい、悲しい、暗い想いとらわれ、不信の塊のような人間と化し」、共同体の人々の善意に対しては常にその背後に別の邪悪な意図があるのではないかと疑い、物事の否定的側面ばかりを見、妻の愛を信じきれない。このような人生を送った結果、子や孫に囲まれて一見幸福に長生きしたように見えるが、「彼の墓石に刻まれた碑文は希望にあふれるようなものではなかつた。」（1207）

A stern, a sad, a darkly meditative, a distrustful, if not a desperate man, did he become, from the night of that fearful dream. On the Sabbathday, when the congregation were singing a holy psalm, he could not listen, because an anthem of sin rushed loudly upon his ear, and drowned all the blessed strain. When the minister spoke from the pulpit, with power and fervid eloquence, and, with his hand on the open bible, of the sacred truths of our religion and of saint-like lives and triumphant deaths, and of future bliss or misery unutterable, then did Goodman Brown turn pale, dreading, lest the roof should thunder down upon the gray blasphemer and his hearers. Often, awakening suddenly at midnight, he shrank from the bosom of Faith, and at morning or eventide, when the family knelt down at prayer, he scowled, and muttered to himself, and gazed sternly at

哄笑には哄笑をという戦略と、笑いが可能にする内なる他者との対話  
—ホーゾーンの短編と現代日本小説の比較を通して— 中谷ひとみ

his wife, and turned away. (1207)

ホーゾーンの主要な関心・テーマの一つが人間の心の闇であるが、我々が善と同様に悪も持ち合わせていること、換言すれば善悪二元論ではなくその二極の間の排除された中間の存在であること、そしてそれが人間らしさなのだということ、主人公はこの事実を受容して生きることができなかった。物語は不信と懐疑の悪しき循環に嵌り、何らの新しい発想や考えも、積極的な行動もなく人生を終わった男の悲喜劇である。彼が機能不全に陥り (immobilized)、行動できずに陰気で非生産的な内省と懐疑のなかで人生を終えたことは、まず彼本人にその原因が帰せられる。新たに共同体の他者との関係を構築しようとせず、彼らに疑念を抱き、拒絶する彼自身に、最も大きな問題があるろう。これまでとは異なるアイデンティティと生き方の構築ができない頑なさ、柔軟性のなさである。この点では「エゴティズム」が、主人公が自ら変われない主要な原因と考えられ、「この『病い』を治癒する道は、自分の内面を秘密の領域として聖別することをやめ、他人とのつながりを回復することだとホーゾーンは考える。」(酒本 92)

ホーゾーンが「エゴティズム、あるいは胸の蛇」のなかで説明しているところによると、自分の内面に「慢性的な病い」をかかえている人間は、その苦痛のゆえに自己を鋭く意識せずにはいられず、例外なくエゴティスト〔自己中心主義者〕になる。ひたすら自分ばかりを凝視しつづけているために、自分を他人とのつながりのなかで考えることができず、日常的な意識の平衡を失い自分を不当に拡大して考えることになる。(酒本 92)

しかし、もう一つの要因も大きいと考えてよかろう。「僕の親戚モリノー少佐」で主人公の若者に寄り添っていた紳士のような存在、生き方指南が、不在であったことだ。少年ロビンと青年ブラウンの年齢差はあるにせよ一前者の方が導師はより必要であろう—このことも彼らのその後の人生を決めたといってよい。

自分の父や祖父の敬虔さ等を懐疑し、新妻の多様な人間性の可能性を受け入れられず、ブラウンは笑う鬼と化した。森で自分の信念を覆し自尊心を損壊するような共同体の人々の嘲笑と挑発に対して、彼は笑って無意識的に自己防衛しようとした。笑いの言説は、笑いの音/リズム/繰り返しは、言語によって意味化された分節や価値観/判断を否定あるいはそれに風穴を穿つことができる。また、それを通して人間存在に全体性を回復させる可能性を孕む。合理性が破砕され、意味が無化されれば、主体のありようが変わる。主体を流動化させて新しい主体を生み出す可能性があるのだ。しかしブラウン青年には絶望の果ての笑いも、彼の救済には役立たなかった。彼はこの後も積極的に共同体の人々と関わろうとせず、精神的に引きこもり続けた。Anthony Storrによれば「独りでいられる能力は...自己発見と自己実現に結びついていき、自分の最も深いところにある要求や感情、衝動の自覚と結びついていく。」(44) この能力により「感情の深淵に触れることができ、喪失体験と折り合うこと、考えを整理すること、物の見方を変えることができる。」

(105) ブラウンは孤独を精神的な向上に結び付ける能力にも欠け、導師も不在であった。

### 1-3. 「イーサン・ブランド」—胸中の蛇の笑い

これまで論じた二人の主人公たちは、成功を夢見て田舎から出てきた若者と、新婚3カ月で人生の新しい局面に達した青年であった。彼らが浴びせられた哄笑は、世間・都会を知らないことや人間性の真実を知らず、また容易にそれを認めもしない無知や頑なさに対する嘲笑であった。そして主人公たちは自己防御のために誰よりも大きな声で笑った。しかし短編「イーサン・ブランド」で我々が考察するのは、自分の意思のままに人生を生きた壮年から晩年にかけての男であり、笑いはこれまでとは異なり、嘲笑ではなく自嘲である。主人公 Ethan Brand は自殺するが、彼の自嘲の笑いにはどんな意味があったのかを考える。彼がなぜ自らを笑ったのか。これまで論じた二人の主人公たちの笑いとうどう違うのか。

小説の冒頭で、イーサンは笑い声として登場する。「陽気な笑いではなく、森の木々が風に揺れるときのように、ゆっくりと重々しい笑い声」(Charvat et al eds. 83)を、現在ここで石灰焼きをしている Bartram とその息子 Joe が聞く。イーサンはここで孤独に石灰焼きをしながら、思索に思索を重ねて「許されざる罪」の探求の旅に出て、今やそれを終え、かつての仕事場であるこの石灰炉に帰還した。「許されざる罪」はどこにあるのかとバートラムに訊かれて、イーサンは自分の胸に指をあてる。さらに「許されざる罪」とは、罪深い情念というよりは「自分以外の人々の魂をのぞき込み」(87)、利用したり、破壊・破滅させることであり、「人間同士の仲間意識や神を敬う心を打ち砕き、すべてを犠牲にする知性の罪」(90)であると答える。「素朴な、人を愛する人間であった彼の知性が際限なく成長し、次第に理性と心情の釣り合いがとれなくなった。…心情は消滅してしまったのである。…かくして彼は人間性という互いに惹かれあう鎖を手放し」、他者への共感も持たず、「冷酷な観察者となり、人間を自分の実験材料としかみなさない。」(99)

Ethan Brand laid his finger on his own heart. "Here!" replied he.

And then, without mirth in his countenance, but as if moved by an involuntary recognition of the infinite absurdity of seeking throughout the world for what was the closest of all things to himself, and looking into every heart, save his own, for what was hidden in no other breast, he broke into a laugh of scorn. It was the same slow, heavy laugh, that had almost appalled the lime-burner, when it heralded the wayfarer's approach. (87)

He had lost his hold of the magnetic chain of humanity. He was no longer a brother-man, opening the chambers or the dungeons of our common nature by the key of holy sympathy, which gave him a right to share in all its secrets; he was now a cold observer, looking on mankind as the subject of his experiment, and, at length, converting man and woman to be his puppets, and pulling the wires that moved them to such degrees of crime as were demanded for his study.

Thus Ethan Brand became a fiend. (99)

こうしてイーサンは「悪魔」(99)になった。この点では、酒で身を滅ぼして今は五体満足と言えない半端人間になり果てても、肉体労働をしながら施しは求めず、勇気と男らしさを失うことなく貧困や逆境と戦っている元有能な弁護士や、これもアルコール中毒ではあるが素晴らしい医術で人々を救っている医師よりも、イーサンの方が罪深い。Esterという名の娘を心理実験の材料に利用して彼女を壊してしまったこともある。

ここでイーサンが爆発させた「自嘲の笑い」は、小説冒頭でバートラムの心胆を凍えさせた笑いと同様の、「ゆっくりとした、重い笑い」(87)であるが、次にこの自嘲が目撃されるのは、自分の尻尾を追いかけ続ける老犬を彼が見たときである。イーサンを一目見ようとやって来た町の人々と共に、一同はドイツ系ユダヤ人によるジオラマの興行を見るが、その直後に愚かな老いた野犬が自分の尻尾を追いかけて疲労困憊し、急に追跡をやめて再びおとなしい老犬に戻る。「一同は大爆笑(“universal laughter”)」するが、イーサンの方は自分との類似を見てとったのか、「すさまじい笑い声」(97)を発する。笑いは彼の内面の状況をはっきり表していた。その笑いのもたらす恐怖に、一同は肝をつぶす。

Meanwhile, Ethan Brand had resumed his seat upon the log; and, moved, it might be, by a perception of some remote analogy between his own case and that of his self-pursuing cur, he broke into the awful laugh, which, more than any other token, expressed the condition of his inward being. (97)

ここで、自分の尻尾を追いかける老犬と同様の愚かな永劫回帰を自分がしてきたことにイーサンは気づき、彼の自嘲が最高潮に達する。彼の問題—「許されざる罪」—は知性の肥大化というよりも、二元論的価値観の一極端に走り、バランスを失ったことに起因する。本来は知性と心情の両者が調和のとれた状態で発展し、人間性も向上していく。

イーサンには何が残されているのだろうか。「これ以上何を求め、何をなすべきか」と考える彼が到達した結論は、石灰炉への投身自殺である。自殺を決意した彼の形相は「最も激しい苦しみの深淵に飛び込もうとする悪魔の顔色」であり、「青い炎が顔の上で踊り…荒々しくぞっとする色」(100)である。彼は語気も荒く叫ぶ。

“Oh, Mother Earth,” cried he, “who art no more my Mother, and into whose bosom this frame shall never be resolved! Oh, mankind, whose brotherhood I have cast off, and trampled thy great heart beneath my feet! Oh, stars of Heaven, that shone on me of old, as if to light me onward and upward!—farewell all, and forever! Come, deadly element of Fire—henceforth my familiar friend! Embrace me as I do thee!” (100)

自殺して一片の灰すら残らないであろうイーサンは、普通に埋葬されて母なる大地に帰ることをも

拒絶する。知性を最大限に肥大化させて心情を無にし、知性と心情という二元論の天秤そのものをもなくし、人との繋がりも共感も消滅させた彼は、自嘲に自嘲を重ねた。そして自殺する今、「胸中の蛇」は死の安息さえも拒絶する。しかし彼は「俺の仕事は終わった、しかも大成功だ」(99)と独りごちていることに注意しなければならない。自嘲的に笑いながらこう言っているのだと想像できる。どんな探求であれ、探求の人生が成功だったとみなされねば、救われない。探求が成功であれば、どんな結末になろうと、何を探求しようと、探求の意義が、人生の意義がある。この意味ではイーサンの自嘲も無意識の自己防衛であったのだ。

#### 1-4. ホーソーンの主人公たち—哄笑には哄笑を、自嘲には自嘲をとという戦略

ホーソーンの短編における笑いの機能を議論するために、本章では「僕の親戚モリノー少佐」、「若きグッドマン・ブラウン」、「イーサン・ブランド」の主人公たちがなぜ笑ったのかを検討した。D. Reynoldsはロビンやブラウンなどの「無垢」から「罪の自覚」への変化を論じ、罪に対する反応の違いに言及している。(257) オーソドックスな先行研究の一つであるが、本論のように「笑い」というテーマからもホーソーン世界に切り込んでいくことは可能であろう。

「僕の親戚モリノー少佐」では、政治体制を覆そうとする新興勢力より大きく哄笑することによって彼らの大義や価値観を抑圧しようとした。旧世界の権力者のリンチに盲目的に加わることが回避できた18歳の若者は、今後客観的な立場から自分の人生を考えていくことが期待される。暴徒の哄笑と嘲笑を打ち消す彼の笑いは、無意識的な自己防衛につながった。ロビンと同行した紳士が、彼を嘲笑する共同体の群衆やリンチの行列のように哄笑・嘲笑することはなく、常に少年に笑みながら(smile)寄り添っていたことを再び思い出そう。共同体の歴史劇の演技者ではなく客観的な観客となる援助をした導師は、これからも色々な人物として彼の前に現れ、援助するであろうし、それは必要なことであろう。

「若きグッドマン・ブラウン」では、新婚3か月の夫で妻の貞淑さや善良さや敬虔さを疑いもしなかった主人公は、森の中で町の人々による黒ミサー悪の共同体で、かつては自分の父や祖父も参加したイニシエーションに加わることを拒絶した。人間が善と同様、悪の側面をも持つという真実を受け入れられないために笑われ続けた彼は「笑う鬼」と化し、彼ら以上に笑うことで自分と妻を護った。しかしそれだけでは人間的な成長は期待できず、自己防衛の笑いの代償とともに後の人生を生きねばならなかった。

「イーサン・ブランド」の、「許されざる罪」を探求し続け、それが自分の心の中にあることを知り、故郷に戻った壮年あるいは初老の主人公は、重々しく不吉な自嘲的笑いを何度も発している。小説冒頭ですでに我々読者には聞こえているが、最後には石灰窯に投身自殺する直前の笑いも自嘲的な笑いである。ロビンとブラウンとは異なり、「許されざる罪」とは何かをひたすら探求し続けた独断的/唯我論的なイーサンには、精神的導き手が関与する余地は全くない。探求が終わっ

た今、彼は自分の愚かな生きざま—知性と心情を調和的に発展させながら人格を陶冶し、人生を豊かにしていけることに気付かなかったこと—を悟る。しかし、それを認めることはこれまでの自分と生き方を否定することになる。人生を自ら終えることで、しかも心情などの余地を一切排除して知性・観念の独壇場の中で人生を終わらせることで、自分のこれまでの尊厳を維持しようとしたのではないかと推測できる。終始自嘲的な笑いを発する彼には、自嘲に自嘲を重ねて生きる彼には、この選択肢しかなかったのである。この意味でも、笑いが無意識的な自己防衛として機能したことがわかる。

このように三短編のなかの二人の若き主人公たちは、誰よりもそしてこれまで以上により大きな声で笑うことによって、一時的であれ群衆の笑いに打ち勝つことができた。哄笑には哄笑をという戦略が功を奏して、自己防衛が可能になったり、自己を維持できた。自らを嘲り続けた—自嘲に自嘲を重ねたという意味であり、自嘲に対して自嘲で対応したという意味ではなく、より若い二人の主人公の哄笑の戦略とは異なることに注意が必要だが—熟年あるいは初老の主人公イーサン・ブランドにとっても、笑いは自己防衛であった。自嘲的な笑いではあっても、笑えることは自己を維持できている証左である。そもそも余裕がなければ、自嘲的な笑いであっても、笑えない。そしてこの笑いが、彼の人生をかけた探求の意義と彼の尊厳とを、たとえ自殺というかたちで自ら終わらせようとも、回復/維持させたのである。本論で議論したホーゾーンの三人の主人公にとって、共同体や群衆/暴徒の哄笑に対する戦略としての哄笑であれ自嘲であれ、その笑いは内なる天使の微笑である。それが野心的に世界に乗り込んで行こうとする若者や、人生の新たな局面にさしかかった青年や、たとえ肯定できない邪まな探求であっても人生/人間性の探求者であり続けた主人公たちを優しい心でいたわる。人生や共同体には悪魔の哄笑や嘲笑や誘惑が満ちている。哄笑には哄笑で対抗する、あるいは自嘲に自嘲を重ねるという戦略は、主人公たちにとっては自己防衛のための生きる方策であった。嘲笑であれ自嘲であれ、笑いは心の闇に棲む天使の贈り物なのである。

## 2. 泣いて笑って悟る人生—『おらおらでひとりいぐも』(2017) 解題

### 2-1. 何が人生の悟りを可能にするか、主人公の何が気づきをもたらすか

若竹千佐子『おらおらでひとりいぐも』(2017)は、老年期にさしかかり、夫が死んで一人孤独な日常を生きる主人公が、独りであっても自分自身を生きるという決心と気づきに達する物語である。まず、小説技法と主人公の性格づけや背景を考察しよう。

(1) 小説の冒頭で我々読者も主人公自身も当惑するのが、東北弁の語りである。「おらだば、おめだ。おめだば、おらだ」(若竹 3)などと内なる声自分が自分に語る声を聴き、自分の頭がおかしくなったのではないかと主人公は訝る。内なる他者が「自分はお前、おまえは自分」と自己開示するように、小説は主に24歳で故郷を離れて約50年、日常会話も思考の言葉も標準語である東京人・現在の日高桃子さんと、彼女の内なる自己との対話から構成される。彼女の心の内側で大勢の

人—彼女自身を含む内なる他者性—が豊北弁で話しかけてくる。東北弁は主人公の故郷の言葉であり、「最古層のおらそのもの…もしくは最古層のおらを汲み上げるストローのごときものである」(15)。したがって小説で展開する、東北弁で話し「最後まで一緒だ」(3)と力づける彼女の内なる自己との対話は、現在の彼女と、彼女の起源との会話/対話を通しての内省を描写している。後者は「核」と言ってもいいが、実体的なものというよりは、主人公の生命体の萌芽の段階での原細胞のようなものと考えたい。流動的であり、常に変化している。話し手も聞き手も自分であり、孤立した今の主人公が前を向いていられるのは、自分の心を友とし、その心の発見があるからである。大勢の内なる他者との東北弁による対話なしでは、彼女自身が「頭わになる」(17)ことはなく、自分についても世界についても深い理解に到達することはできない。

主人公の内省はまず、言語—東北弁—を通しての、自分理解のきっかけを彼女にもたらす。小学校1年までは「性差など関係な」(17)く「おら」と言っていたが、教科書の「僕」や「わたし」という語で、それまで言っていた「おら」という言葉が「心に引っかか」(18)るようになる。「おら」という呼称に蔑みと愛着のアンビヴァレンスを持つのである。しかし「わたし」と言えば、自分を取り囲む花や木や人と人のつながりなどを「足蹴にするような裏切りの気分」(18)に襲われ、複雑である。東北弁は彼女の存在の最古層に存在し続ける。代名詞ではあるが、自分の呼称が「おら」と「わたし」の間でふらつくことがアイデンティティの不安定さを示唆・象徴するように、夫の死後露わになった精神的危機を克服して自己回復するには、アイデンティティ意識をかかざることや東北弁との折り合い—調和的再内在化—も重要な鍵となる。

(2) 小説は主人公や読者に対して、視覚世界ではなく聴覚世界に身を置かせる。感覚・認識世界が異化されて、声/音を多く聴くことになる。我々は情報を圧倒的に多く視覚から得ている。世界はいわば、我々が眼を通して理解するもので構築されるが、それがありのままの世界の姿・像であるとは限らない。視覚からアプローチするのではなく、より原初的感覚である聴覚を通しての世界・自己認識及び体験とすることで、新世界への開けが期待できる。また、この異化された小説空間では赤色のインパクト、そして赤と他の色とのコントラストを通して、世界が絵画的に描かれる。小説の読者は東北弁の対話と絵画的表象からどのような物語を読み取るかが問われる。赤い彼岸花の群生から、枯れてはいるが十分赤いカラスウリ一つに焦点が絞られていく絵画的な手法、そして赤色という生命力のシンボルとインパクトの効果は、壮年から老年の推移と生命の鮮烈さを示唆し、彼岸花の群生から一つのカラスウリの赤を通過して主人公が生きる力を得ていくプロセスを効果的に表現する。

(3) 主人公の性格・精神性 (mentality) が彼女の気付きと精神的成長に説得力を付与する。例はいくつも見いだせる。彼女は純粋な好奇心が旺盛で、書くことが好きである。書くことは内省を促し、言語化することは問題を明確にしてその解決に導くから、気付きには必須条件の一つであると言ってよからう。また、彼女は他人の心のみならず自分の心のうちまで「ああでもないこうでも

ないと考え考えするのが一番好き」(66)である。夫の墓参の「道すがら出会える自分が実は楽しい。」(106)どんな姿であろうと自分の新しい側面を知ることは喜びなのだ。「問いがあればさらに深められる。自分に対する好奇心、それが待つだけの日々の無聊を慰めてくれると…信じている」(110)。老いとその先(死)は全く未知ゆえ、知らないことが分かるのが一番面白い。「これを十分に探究しつつ味わい尽くすのが、この先最も興味津々なこと」(146-7)というような感性和楽天性が、彼女の特徴である。

(4) 興味深いことに、小説で示唆される主人公の自己は、実体的というよりは流体的存在である。内なる多数の自己/他者が「小腸の柔毛突起」(35)のように蠢いている。いずれも主人公の「栄養」を吸収した分身であり、各々物語を持ち、それを語る。今の生活主体としての桃子さんは、その多数/無数の自己を包含する皮膚にすぎない。しかしこの流体的存在様式ゆえに、悲しみや悲しむ自己を超えるとき世界と溶け込み一つになっていくことが容易になる。内なる静かな声が「溶け込みなさい、溶け込むんです」(134)と言うと、不思議なことが起こる。

不思議なことだけれど、ほんとに不思議なんだけど、だんだんおらの手足、足指の先に至るまでなんというか際があいまいになっていぐという感じがした。体の表面が限りなく薄くなって境目がなくなって、おらはほどけていぐ。おらは空中に拡散して、部屋じゅうにおらとおらの悲しみが充満していぐ。おらは全体でもあり部分でもあるというような、浮遊して解き放たれるというような気分になって、何とも言えない穏やかな安らいだ心地がした。それでいて意識はどこか一点に集中してもいて、今起ごっているこの初めての感覚に驚愕していただきます。(135)

さらに、小説の終末近くで、夫の死後見えない世界—死者の国—を切望し、それがこの世に同時存在することを信じるようになった主人公は、自分がその見えない世界の「感覚受容体」(153)であると考えようになる。彼女は何かと理屈に走る傾向があったが、もはやロゴス—辺倒の存在様式ではない。logos-orientedな存在から別の極端の感覚的存在に変わりつつあるという意味では問題が残るにしても、彼女は感覚に特化した存在であり、ロゴスでは見逃すことも感知できる。

(5) テレビのドキュメンタリー番組を見てから嵌ってしまった人類の歴史について、主人公があれこれ書きしるした「四十六億年ノート」という小道具の効果も見逃せない。彼女は「細かな字でぎっしりと書いた大学ノートを満員電車の窮屈な座席でこれ見よがしに押し広げ、さも忙しげにこれを読むということも平気です」(28)。これほど興味津々なのだ。人類の歴史や人間同士の繋がり—人間が社会的存在であり、協働がなければ人類は生き延びられなかったこと—や彼女が今ここに生きている奇跡、そして宇宙的存在と個人の生の相似へと読者の想像を膨らませるには、この小道具は効果的である。また、ノートと同様に、故郷の自然の象徴である八角山も重要な役割を担う。山は故郷に家族がなくなっても、変わらずにそこにある。東北弁と共に自分の「居場所」である。主人公の自己理解には原点に遡る必要があるから、不可欠である。また夢のなかで、山のふ

もとで営々と生きてきた女たちが登場するが、主人公は同じ痛みや苦しみを背負う彼女たちに強い「共感」(149)を抱く。四十六億年ノートと八角山は主人公を自己確立と人間同士の繋がりへの気付きへ方向づける、不可欠で効果的な装置である。

## 2-2. 内なる対話を通して何を学ぶか

小説上の戦略—主人公の性格づけ(1)(3)(4)や背景の巧みさ(2)(5)—により、彼女の気付きの物語は進展するが、彼女は何を悟ったのだろうか。

桃子さんは自分が太母ではないかと恐れている。彼女の母は勝気でいつも命令口調、物事が自分の思い通りにならねば気が済まない人で、娘の桃子さんが年相応に女らしくなるのを恐れてもいた。このような環境で育ったため、母の顔色をうかがってばかりの幼年時代であった。この母が子育ての模範を示すことはなかったから女の子への接し方が分からなかったこともあり、抑圧され続けた桃子さんは自分の子供たちに自身の欲望を投影し、自分が着たかったフリルのいっぱい付いたスカートに娘にはかせたり、「自分好みに思い通りに操ろうとした。」(43)自分の願望を子供たちに押し付けていたのではないか、自分がやりたいことを息子と娘に仮託して、自由にのびのびと自分自身を生きる喜び・幸福を彼／彼女から奪ったのではないかと今は後悔している。「かあさん、もうおれにのしかからないで」(46)と言って家を出た息子に関しては、彼の空虚感はその責任だと考えるようになった。「贖罪」の気持ちもあったからであろう、おれおれ詐欺にひっかかって現金を渡してしまう。東北弁の内なる自己との対話を通して、自身も東北弁で応答する桃子さんは、子供たちを「期待という名で縛ってはいけない」(51)と、今は反省する余裕ができた。成長したのである。夫が死に、子供も独立した今は、悔いは残るとはいうものの、もう誰からも奪うことも、奪われることもなく、自分自身を生きることができる。彼女も「自由」(52)である。

内なる他者との対話は主人公に内省を促す。「ひとりにはさびしい」と繰り返す主人公に、「ちょっと目を離すとすぐこれだ。おめだば、すぐ思考停止して手あかのついた言葉に自分ばよせる。なにが忍び寄る老い、なにがひとりにはさびしい。それはおめの本心が。それはおめが考えたごどだが」(26)と挑発する。安易な言説に落ち入って「ひとりにはさびしい」と繰り返す言を言うだけなら、何も進まない。打開策も見えてこない。後退するだけだ。さらにその声は「当たり前ど思っているごどを疑え、常識に引きずられるな、楽なほうに逃げんな、何のための東北弁だ。われの心に直結するために出張ってきたのだぞ」(26)と続ける。また、主人公は家に縛られない、親の言いなりにならない、新しい女になったつもりで、故郷を捨てて東京に来たが、「結局古い生き方に絡め捕られた。誰そのために生きるという慙愧怨念の生き方をしてしまった」と言えば、「あいやあ、そこまで言うが、そこまで言っているんだが／おめはそれほどのもんだが」(90)と対話が続く。主人公は人が自分に求めた「やさしさ、従順、協調性」を第一に考え、人の期待を生きてきた。「やり直したい」と願っても、「からかうようなあざけるような声で遅い、遅すぎる、なにを

今更、と引きとどめる声」(122)もある。しかし内なる他者の声は、夫が死んで一番つらい時に彼女の心を鼓舞し、自由に生きると励ましたり、「なんでも喋れ、なんだって聴いてやるじゃい」(107)と勇気づけることも忘れない。このように自分自身—内なる他者—との対話を通して、人は内省を深め、思考を醸成し、自己を成長させる。

夫に関しても、主人公は彼女自身を生きたとはいえなかった。夫の周造は「父を超えたい…父に認められたい」(82)と思い、ひたすら努力したがうまくいかず、もがき苦しんでいた。この複雑な感情を持つ夫を幸せにしたい、夫を喜ばせたいと思い、夫の理想の女になるよう努めた。夫を魅了し幸福にするという目的が常にあり、それを完遂できれば、生きる手ごたえを得ることができた。夫に尽くしてきた、それは本当だ。しかし今は、自分が夫を呑み込み、後ろから操り、内面を支配していたのではなかったかと思う。自分が弱いから一人立ちできず、他人に寄りかかって彼を支える。「強いから支えるのではない、弱いから支える。支えることで自分の輪郭を確かめようとした」(83)と、今は自分の弱さにも気がつくことができる。「夫は疲れていたのではないか、心をおまえに預けて走り続け、疲れているのも気付かずに突然、心筋梗塞で一日も寝込むことなく死んだ。お前の愛が夫を殺した」とまで言う自分が内にいる。「愛という名のもとにどちらも十全には生きられない」(94)、そうでなければ一体愛とは何だ、と問いかける声も内にある。内なる他者性との対話を通して、夫婦関係についても内省が深まっていく。

このように、主人公は自分のために生きるのではなく、夫のために、家族のために、妻や母という役割や夫が望む女を生きてきた。ところが夫の死後、文字通り「体が引きちぎられるような悲しみ」(114)や後悔や自責の念を経験して、それまで培ってきたと信じてきたものが全部薄っぺらな理解だったことを知る。これまでの人生は「見るだけ、眺めるだけ…自問して自答するだけ…人に何ら働きかけない、ましてや影響を及ぼすこともない」、「人に関わる余地」(66)のない人生だったことを悟り、自分が想像もしなかった世界があることを知る。と同時に、思ってもみなかった世界—夫がいる世界—があってほしい、いやあると確信し、その世界や発見すべき未知の世界へ「おら、いぐも。おらおらで、ひとりいぐも」(115)と決心することになるのである。

### 2-3. 笑いと対話

孤独な桃子さんの「心の中で声にならない声、音にならない音の応酬」(57)が、懐かしい東北弁の響きで内なる声との対話が続く。この対話のおかげで、主人公の内省は深まり、身を千々に引き裂く、心身一体の感情と言ってもよいような孤独、悲しみ、後悔の念から桃子さんは徐々に解放されていく。夫の病に気付けなかった自責や自分だけまだのうのうと生きている負い目に対しても、自分はまだ生きている、生きていていいんだと思えるようになる。自己や生き方についての真剣な内省である。しかしこの小説で特徴的なのは、ユーモアにあふれ、主人公の様々な気付きに笑いや微笑みが大きく関わっていることである。東北弁ゆえに可笑しく聞こえるというわけではな

く、また単に可笑しいから、あるいは面白いから笑ったり微笑んだりするのもない。様々な笑いや微笑みがこの小説には見だせる。順に追って見てゆこう。○で囲った数字は重要な契機を示す。

1) 自分の内に柔毛突起のように棲み付いて東北弁で話す自分・声に戸惑ってはいるが、自分が乗っ取られても構わないと思ひ、主人公は「あさってのほうを見ながらうふうふと笑」(14)う。ネズミがごそごそ音を立てている周囲の様子も気になるが、飛び飛びで細切れの思考が頭の中を駆け廻り、様々な声が飛び交う状態が、そして東北弁の言葉が自分のこころのなかに氾濫していることが、怖くもあるが、興味をひかれる。その見慣れないものの正体は何かと好奇心旺盛である。

2) 感傷的になり、やさしかった祖母の前掛けに顔を埋めて泣きたい衝動に駆られるが、四つや五つの子供じゃあるまいしと思ひ「気恥ずかしくて笑うしかない。」(32)

3) 実は老いた未来の自分だと分かるが、白髪交じりで蓬髪(たかまげ)の山姥を見た瞬間、「あはあはと笑」う。太母とは「子供を大事に大事に育てた」が、その子の「命を呑み込んでしまったのではと恐れる母親」であり、山姥は「太母ののちの姿である。」(50)山姥の姿を見た瞬間は可笑しかったが、自分の子育てを回想すると、自分も太母であったことを認識する。自嘲の笑いでもあろう。

4) 「人中にいたいと痛切に思」いながら病院へ行くが、人里に下りてくる「ごんぎつねか、と自分で自分を笑」(55)う。自嘲であるが、孤独は癒しがたい。

5) 病院で、自分より十歳ほど若い女が不安げにハンドバッグをひっかきまわしながら何かをずっと探しているのをしばらく盗み見て、自分と同じだと思って涙するが、どこかで見た風景だとも思う。高校出たてで東京に出て、帰省する夜行列車の車中で、中年男が柿の種を食べながら何度も何度もウイスキーを取り出してはちびりちびり飲んでいる姿を思い出す。「生意気で傍若無人だった」若き主人公は、この時も盗み見て笑った。「おじさんの動作を予測して茶々を入れ、その通りだと心の中で笑い転げた。」「笑いをかみ殺しながら見ていた。」(64)これらの病院と夜行列車の場面で主人公は笑ったが、悪気はない。「純粹の好奇心」(66)ゆえであった。しかしこの後彼女は見るだけ、眺めるだけ、盗み見るだけだった人生の広がり(ひろがり)のなさに気づくことになる。人に積極的に関わることをしない人生であったから、今の孤独も仕方のないことなのだと知る。

6) 夫・男を心から愛して尽くしたが、その男を呑みこんでしまったのではないかと自問する主人公は、「おまえの愛が夫を殺した」と詰寄る内なる声に反論したい。しかし夫の異変に気付かなかったことの自責や悔いは消えない。そのような状況でも、夫が亡くなる半年ほど前、木版画に「自分の喜び」を発見した時の彼の「不思議な笑み」(96)が忘れられない。彼女には今はわかる。夫も「彼の父由来でもなく、桃子さんのためでもない、自分の喜び」を見つけたのだ。それゆえ、自分たちの愛のかたちも変わる、人は変わる、変われる、自分にも未来はあり、自分は「途上の人」であると彼女は思えるようになる。「未来には今とは想像もつかない男と女のありかたがあるのだと思う」と、「笑みさえも浮か」(97)ぶ。未来の愛のかたちと可能性を考えて、期待もあるのだろう。

7) 墓参のため歩く主人公は、雑草と取っ組みながら進むうちに、自分が「削がれ削られたてら  
てらの底には、猛々しく唸る獣がむき出しになっている」ことに気がつく。そして「今やっと、や  
あやあと声をかけ、うふうふと笑う。」穏やかで従順な自分の底に「ずっとないがしろにして見て  
見ぬ振り」をしてきた猛々しい面が消えずに残っていたことへの嬉しさと感慨の笑いであろう。こ  
こで注目すべきは、新しくかつ古い自分や自己の多面性の発見であり、墓参の「道すがら出会える  
自分が実は楽しい」(106) と思える心性の余裕、そして猛々しい自分をそのまま認めることができ  
れば、「老いるという境地もそんなに悪くない」(106) という、老いに対するこれまでとは異なる  
見方である。ここでも主人公の精神的成長が見てとれる。

⑧次の笑いは、主人公の気付きにおける重要なステップアップを示唆する。桃子さんは自分の  
人生でどんな実を結んだかと自問し、「何にも、何にもながったじゃい。亭主に早くに死なれる  
は、子供らとは疎遠だは、こんなに淋しい秋の日になるとは思わねがった」という、「さばさばと  
した答え」に「腹の底から笑いがこみ上げ」てくる。「大きな叫ぶような哄笑」である。なぜこん  
なに可笑しいのかは分からないが、「腹をたたいて涎を垂らして笑っている。」(109) この「制  
御不能の笑い」は、幸福ゆえの笑いでもなく、「絶望の果て笑いに転じた」笑いでもなく、「しい  
て言えば淡々と過ぎ去る時を待つ…笑いである。」(110) この時の笑いは、感嘆/感慨のそれ  
であると言ってもよかろう。あまりにも大きな驚きなので呆けたようになっているのだ。一所懸命に  
生きてきて、この仕打ちか、と主人公は幾分超然と自分の人生を眺めている。人生とはこんなもの  
だ、期待が外れてこうなった。自分の人生に呆れていると言ってもよい。笑うしかなく、淡々と、  
笑いながら時が過ぎ去るのを待っている。この後、自分の人生で一番輝いていたのはいつだった  
うかと考えて、子供時代や夫との出会いや小さい子供を抱えて懸命に生きていた頃の事を考える  
と、「立ちどころに桃子さんに笑みがこぼれる。」しかし自分が一番輝いていたのは、幸福で満ち  
足りていた時ではなく、夫の死後の数年ではないかと考えるに到る。夫の死は自分を「根底から変  
えた。」(111) 結婚・家庭生活で、夫が喜ぶような女であり続け、妻や母を生きるそれまでの生  
き方ではなく、自分自身を生きることができるようになった時が自分の一番輝いていた時だった。  
このことに気付くきっかけとなったのが腹の底からこみあげる笑いであり、大きな叫ぶような哄笑  
であった。頭の中が空っぽになるほどの、体中の力が抜けるような不幸に、恨みも何もない。淡々  
と受け入れるだけである。呵呵大笑がきっかけとなって生じたこの空白が人生の気付きという大き  
な跳躍を準備したと考えられる。笑いの声の大きさとリズムによって意味構造が炸裂して空白が生  
れ、自己・存在が流動化し、そこに新しいものが生れたのだ。これまでの例とは異なる効能が笑い  
にあることが示唆されている。

9) この直後、主人公はさらなる新たな気付きを経験する。夫の死から数年後、不眠の日々が続  
く。強いがやさしい語調で、夫が「俺が見てやるから、寝ろ」と語りかける。なぜ死んだ夫の声  
が聞こえるのか、その意味は何なのかと、何にでも意味を見出そうとする桃子さんは思う。彼女に

とっては、意味があれば、いかに苦しいことでも悲しいことでも我慢できるからである。しかし「その意味を探した愚直を今になって桃子さんは笑う。」(113)自嘲であろう。そして、夫はいる、夫の住む世界はある、今は別々なだけだと思えば、彼女は自分の変わりように目を見張る。これまでは現実世界に充足し、科学的でないことは受け入れなかった。軽蔑さえしたが、夫の死後は、目に見えない世界があつてほしい、その世界に分け入りたいと切望する。この切実な願いが世界の扉を開くことになり、様々な「声が溢れる」ことになる。自分の内なる声のみならず他人の声、死者の声、草木や流れる雲などからも声が聞こえ、話ができて、主人公の「孤独を支える。」(115)ここで注目したいのは、この世／あの世、あるいは現実／想像の二元論言説、そして科学的ではない言説や世界観を受け付けられない頑なさから脱して、新しい世界が開かれたということである。これを可能にしたのが、内なる様々な声との対話であり、万物が孤独な彼女に語りかける言葉とそれらとの会話である。そのきっかけとなったのが笑いであった。

⑩これに続く笑いは、これからは自分のやり方で自分自身を生きていくという決心に彼女を導く。自分の内から亡夫の声が聞こえるが、それではあの世に繋がる通路は自分のなかにあるのかと主人公は考え、「のどの奥でひゃっひゃと声にならない声をあげて笑う。」一見馬鹿げた問いに対する自嘲気味の笑いであるが、この後彼女は「何如た<sup>なんじよ</sup>つていい。…もう迷わない。この世の流儀はおらがつぐる。…おらはおらに従う」(116)と決意表明する。笑ううちに心には余裕が生れ、生きる力が湧いたのだ。

11) 夫の墓参の途中、斜め前を腰をかがめた老婆が「独りがいい、独りでいい…」とぶつぶつ言いながら歩いているのを見て、未来の自分だとわかると、主人公は「笑いながら後を追った。」

(138) 思った通りの自分の未来の姿であり、やはりそれ自体可笑しい。しかし彼女は心に余裕を持って笑っている。日々を重ねて初めて経験する感情や気づきがあり、彼女はそれをそのまま受け入れられる境地になりつつある。

12) その後、まだ墓参の途中、農道が途切れ、霊園に続く杉木立の上がり坂、足の痛みをこらえながら歩く時、死はすぐそばに息をひそめて待っていると思うが、主人公は恐れない。死は亭主がいるところであり、今ここにある世界でもある。死は恐れではなく「解放」であり、「安心」であると分かる。内なる声を聴き、その声と対話でき、「笑いながら」歩き続ける。(140) 死の強迫観念から解放されて心に余裕が生れると、将来の期待から思わず顔もほころぶのだろう。

⑬墓地に到着して、墓と墓の間のわずかな隙間から蔓が伸び、塔婆に絡まり、枯れて半分ひしゃげてはいるがまだ十分赤いカラスウリを一つ見つけた時の笑いは、彼女の認識におけるもう一つの重要なステップアップである。この赤いカラスウリを見て、「笑い」が「ひっきりなしにこみ上げる」。ひとしきり笑うと、笑いの意味がわかる。カラスウリの「赤に感応する」自分がある、「まだ戦える」、「こみ上げる笑いはこみ上げる意欲」であることが分かるのである。「まだ、終わっていない」、そう思って主人公は「また笑」(142)う。

#### 2-4. 『おらおらでひとりいぐも』—泣いて笑って悟る桃子さんの人生

我々読者は、これからの主人公は受け身に生きるのではないと断言できる。どんなことがあっても、自分の人生と闘い、日高桃子さんを生きるだろう。その意欲も気力も力も今の主人公にはある。彼女がこのような境地に至ることができたのは、内なる自分自身/他者との対話と、その際にみられる様々な笑いを通してであった。この小説では笑いが現状を破碎/否定する契機になり、意味構造の炸裂や流動的主体と新たな存在様式の発見につながったことが分かる。

しかしもう一つ、笑うことと泣くこととのコントラストとバランスでプロットが展開していくことも興味深い。主人公はやさしかった祖母の前掛けに顔をうずめて泣きたい気分になる。病院でハンドバッグをひっかきまわして何かを探す女性を見て、自分と重ね—自分と同じだと思い—涙した。このときはまだ、主人公はどう生きていっていいかわからない。しかし小説の最後は泣きで閉じられ、かつ開かれる。新年の興奮も収まり、世間に平凡な日常が戻ると、「みな光り輝いている。」(153) 光も音も澄み切っている。そして節分の日、四十六億年ノートと共に主人公の道行に同伴してきた、アフリカから出た人類に向かって日高桃子さんは「言葉をかみしめるようにゆっくり」(156) 語り出す：

歩いだんだべな、歩いだんだべ

寒がったべ。暑がったべ。腹も減っていだべな。てへんだったな

…

どこさ行っても悲しみも喜びも怒りも絶望もなにもかにもついでまわった、んだべ

それでも、まだ次の一步を踏み出した

ああ鳥肌が立つ。ため息が出る

すごい、すごい、おめはんだちはすごい。おらどはすごい

生きで死んで生きで死んで生きで死んで生きで死んで生きで死んで生きで死んで生きで

気の遠くなるような長い時間を

つないでつないでつないでつないでつないでつないでつなぎにつないで

今、おらがいる

そうまでしてつながっただいじな命だ、奇跡のような命だ (156-8)

そして主人公は「おらはちゃんとに生きだべが」(158) と自問する。これまでの「見るだけ眺めるだけの人生に」後悔はしていない。自分に「お似合いの生き方だった」と思う。しかしなぜかわからぬが、「人とつながりたい、たわいない話がしたい。」つまり「人恋しい」のだとわかると「わっと泣き出し」(159) てしまう。「あれほど嫌った涙を今度はぬぐいもせずただ泣きに泣いた。涙と鼻水と、こなれた南京豆の混じったよだれでぐしゃぐしゃになりながら、赤子のように桃子さんは泣いた。」(159-60)

「普段は理詰めでものを考えたいタイプの間人」(69) であった主人公は、「内側から聴こえて

くる様々な声」を「友」(69)として、声たちと対話を重ねてきた。「自分のような…容易に人と打ち解けられず孤立した人間が、それでも何とか前を向いていられるのは、自分の心を友とする、心の発見があるから」(70)だった。内向的で孤独な人間にとって、内なる他者・自己との対話なしでは生きることも成長することも困難であろうが、そのさらに大きな意義は客観性の担保であり、視野の拡大であろう。内なる対話を通して、そして時に泣き、しかし多く笑い、主人公は自身と人生について様々な気付きに到達できた。否定的で不毛な感情の悪循環に落ち込むことはもはやなかろう。今、「赤子のように」「ただ泣きに泣い」(159-60)ている彼女は、ロゴスも妻や母という役割を生きることも超越している。笑うことと同様に、ただ泣きに泣くことも論理性や意味構造を内破させ、空白を作り、そこから新しいものを生じさせる。このことは我々も実際、人生で経験することであろう。これからは主人公が〈日高桃子〉を生きていくことが、我々には確信できる。今日は3月3日、女の子の節句である雛祭りの日、主人公にとっては懐かしい人形を飾ってお供えをする、人形供養の日である。過去の自分の供養でもあるのだ。供養すればまたさらに未来が開けることが暗示される。それゆえ、懐かしい祖母の声を聴くと主人公は「おらのごど迎えさ、来たのが、もちょっと待ってけろ」(160-1)と答える。今から、孫のさやかが持参した壊れた人形を二人で補修して新しい服を作るつもりだ。新生の隠喩である。彼女はその前に窓を開けて春の匂いを嗅ぐ。新しい生<sup>life</sup>の味を感じ取っているであろう。桃子さんの人生は、泣いて笑って悟る人生である。人生も小説も笑い<sup>と</sup>泣き<sup>一</sup>喧騒<sup>一</sup>と静寂に満ちている。

### 3. 文学と笑い

笑いはそもそも、意味構造を破碎し、主体の流動化を促したり、それまでの陰鬱な気分から脱して新しい主体の形成につながったり、状況に立ち向かう力をもたらす。この意味では、恐怖と同様に生き延びるための重要な機能である。しかしホーソーンの三短編の主人公たちが人生の窮地や探求の果てに見せた笑いは、無意識の自己防衛だった。他の登場人物、特に共同体の人々、群衆あるいは暴徒の嘲笑や哄笑とは違う笑いであるが、笑いの本来的な効果は発揮されなかった。彼らの哄笑にロビンとブラウンはそれを凌駕する哄笑で対抗することで、そしてイーサンは自嘲に自嘲を重ねることで、逆説的に自分を護ろうとした。しかし、新しい自己の形成にはつながらなかった。

一方、『おらおらでひとりいぐも』の74歳の主人公は、夫の死後子供たちとも疎遠になり孤独な毎日を過ごす。しかし精神的危機にあっても、さまざまに笑い、笑みがこぼれることは注目に値し、この小説の特徴の一つと言える。自分のなかの柔毛突起のようなものが自分に語るイメージなどを想像して笑い、子供っぽい自分を恥じて苦笑いし、山姥のような自分の姿を眼前に見て驚きかつ自嘲的に笑い、馬鹿げたことを考えたことで笑い、自分の猛々しい部分が生き続けていたことを知ってうれしく微笑み/ほくそ笑み、未来の男女関係のかたちを思い描いて微笑み、何にでも「意味」を探そうとしていた自分の愚直を今は笑うことができる。しかしこれらの笑い・微笑みより重

要な笑いがあり、主人公の気付きの重要なステップアップに関与していた。自分の人生でどんな実が結んだかと考え、「何にも、何にもながったじゃい。亭主に早くに死なれるは、子供らとは疎遠だは、こんなに淋しい秋の日になるとは思わねがった」という、内なる自分の「さばさばとした答え」を聞くと、腹の底から笑いがこみあがってくる。「大きな叫ぶような哄笑」である。なぜこんなにおかしいのか分からないが、「腹をたたいて涎を垂らして笑っている。」(110) 絶望の果ての笑いではない。淡々と笑いに笑っているが、この後主人公の気付きはより深まっていく。亡き夫の声が聞こえ、あの世に通じる通路は自分の中にあるのだろうかと考え、「声にならない声をあげて笑う。」(116) しかしこの笑いが「もう迷わない。自分の生き方は自分で決める」と力強く宣言するきっかけとなる。笑ううちに心に余裕が生まれ、生きる力が湧いてきたのだ。死は恐れではなく、解放であり、安心であると思えるようになり、笑いながら夫の墓に向かって歩き続ける。そしてクライマックス、墓地に着き、墓と墓の間のわずかな隙間に蔦が伸び、枯れて半分ひしゃげてはいるがまだ十分赤い、ひとつのカラスウリの生命力を見た時、「笑い」がひっきりなしにこみ上げる。その赤に感応する自分がある、自分はまだ人生と闘えるという思いが笑いを生んだ。いや同時に、笑いがその思いを生んだと言える。そして、こみ上げる笑いはこみ上げる意欲だと主人公は知る。この一連の気付きの過程における笑いは、一般的な笑い—可笑しいことに出くわしたり見たりしたがゆえの笑いや自嘲的笑い—とは異なり、より複雑な笑いである。この小説における笑いは内なる他者・自分自身との対話を促す契機であり、心の余裕ゆえに気付きに達するという良い結果を準備する。また笑いは気付きの結果でもある。ホーソーンの三短編の主人公の自己防衛的な笑いは全く異なる笑いが、この日本の現代小説には示唆されているのである。

ここでもう一度、笑いとは何であるかを確認しよう。文化人類学者の山口によれば、笑いは「全てのものを闇に帰し」、「つまり人為的な区別、差異性を無に環して」(佐藤 編 205)、そこから世界を新しく構築する。また、「笑いは意味を脱臼させ、コンテキストをはぐらかす…おさまっているものをばらばらにし解体し、構造の関節をはずす…文脈を武装解除する方法であると言うこともできる」(山口 監修 4-5)と語っている。対談での山口の言葉を引用する：

今我々が必要とするのは内側にもっている闇が自然に笑いという形で表面化してくるといふ、その闇を表面化する切っ掛けみたいなものが笑いの観点にあると思うんです。…そこが笑いというものの考え方の原点なんだろうと思いますね。そこから全てのものを闇に帰してしまうものとしての笑い。つまり人為的な区別、差異性を無に環してしまう笑い。その闇に一度戻ってしまつて世界を甦えらせるなり鍛え直すなりする笑い。そこから何か全く見馴れないものを造形して来る笑いというようなものがあるような気がするんですけどね。

(今井夏彦「現代アメリカ文学におけるユダヤ人の歪んだ笑い」；佐藤 編 205)

「全てのものを闇に帰し」、「つまり人為的な区別、差異性を無に環して」(205)、そこから世

界を新しく構築する機能を笑いが持つことは注目に値する。

同様の言説が Julia Kristeva の「詩的言語」についても見られる。『詩的言語の革命』の訳者・原田邦夫は「訳者あとがき」で、彼女の「詩的言語」の概念を理解するために、原書の裏表紙に掲げられた J.K の署名のある短文を以下のように訳出している：

詩的言語は、だから言語構造と語る主体の形成のなかに、否定性を、破断をもたらす。

このような「言語」は**実践**として読みとらねばならない。言語に固有の体系とともにそしてそれを突き抜けて、主体がこうむる危険と社会総体のなかに積み上げる賭け金の方に向けて。常に**セミオティック**である欲動の侵入、それが**否定性の契機**、**リズムによる意味構造の炸裂**、**主体の流動化**だ。**シンボル**秩序のなかへのセミオティックの配置、それが境界、言表行為、意味作用の時点をなす。弁証法によって結ばれ切り離しえないこの二つの運動は、詩的言語をいかなる実践の理論をも再考させずにはおかない実践にしているのだ。

(341)

詩的言語は「否定性の契機」となり、「意味構造の炸裂」と「主体の流動化」をもたらす。

文化人類学者で山彦伝説における笑いを論じる小馬徹<sup>こんま</sup>も、『笑いのコスモロジー』でクリステヴァを援用しながら、笑いが意味構造の炸裂と主体の流動化をもたらすと論じる。彼によれば、笑い声は言語の意味化された分節を否定し、それによって再び人間の声に全体性を与え、呼気の身体的起源とそれに由来する両義性の近辺へと音声をもう一度連れ戻す。それは、笑い声が「あははははは」、「うふふふふ」、「いひひ」など音声的には分節されていながら、実際には音声の反響でしなく、本質的に意味次元での分節を拒否しているからである。(26)

…赤ん坊が生後間もなく笑う事実から端的に窺える通り、笑いは言語や意識以前の生理に結びついている…しかも笑いの基底をなすのは生理ではあっても、動物とは直接的な共通性をもたない、人間に固有の生理であると考えなければならない。

こうした見方に一つの解明を与えるのが、クリステヴァが『ポリローグ』で注目したアナクリーズだ。これは、まだ明確な自他の意識を持たない生後三ヶ月の赤ん坊に見られる、筋肉と声のひきつれとしての始原の笑いである。…それらは赤ん坊（の自己）を世界（つまり、自己ならざるもの）へと繋ぎ止める最初の点であると同時に、自己と自己ならざるものとを切りわける最初の点でもある。…したがって、言葉・意味・意識・想像力に先行し、自他の分節以前の始動の標としての（快の）笑いであるといえる。(ii)

クリステヴァは、詩的言語とは、言語の構造と語る主体に否定性や破断を持ち込むものであり、それはリズムによる意味構造の炸裂と主体の流動化をもたらすという〔クリステヴァ、一九九一〕。彼女が詩的言語について述べたことは、そのまま笑いにも援用できると思う。…笑いもまた、意味構造の炸裂と主体の流動化をもたらすのである。というのも、詩もまた笑いと同様にノンセンスの深淵に育まれるのだから。

しかしながら、実は、ノンセンスが笑いを誘うという以上に、笑いこそがノンセンスの極北に位置するのだと考えなければならないのではあるまいか。笑い声を構成する、リズムなきリズムとしての「X, X, …」という反響、ないしは等拍は、今度はリズムを凍結してリズムそのものを破壊し、無意味化するからである。(19)

笑いは「笑い声という音声を伴う擬似発語現象、あるいは反発語現象として把握されなければならない」(6)。つまり笑いは一つの言語／ディスコースであり、その肝要は、笑いの音／リズム／繰り返し返しの力が「意味構造の炸裂と主体の流動化をもたらす」(19；クリステヴァからの援用)あるいはその反映である点である。言語によって意味化された分節を無化することによって、人間の声一ひいては存在一に全体性が回復される。合理性が破砕され、意味が無化され、主体のありようが変わる。これが笑いの最重要効果の一つであろう。

ホーソーンの短編と日本の小説において、笑いは何をもちたのか。前者の自己防衛の笑いにおいては「合理性が破砕され、意味が無化され、主体のありようが変わる」開・広がり<sup>あけ</sup>は感じられない。本来の笑いの効果は発揮されず、主人公たちの自己認識も世界理解も止まったままである。しかし後者においては、笑いは内なる他者そして世界の万物との対話を可能にし、危機的状況にある主人公に存在の全体性を回復させ、主体のありようを変えて新生を準備した。この日本の小説との比較がなければ、ホーソーンの三短編と笑いについての理解も深まることはなかったのである。

\*本稿は日本英文学会中国四国支部第71回大会(2018年10月27日 鳥取大学)での口頭発表に執筆・修正を加えたものである。

## 引証・参考文献

雨宮俊彦。『笑いとユーモアの心理学—何が可笑しいの?』。京都：ミネルヴァ書房、2016。

岡田量一。『ホーソーンの短編小説—文学・愛・実在』。東京：北星堂、1996。

神奈川大学人文学研究所 編。『笑いのコスモロジー』。東京：勁草書房、1999。

國重純二 訳。「ぼくの親戚モーリノー少佐」。『ナサニエル・ホーソーン短編全集 I』。東京：南雲堂、1994。pp. 61-86。

----。「若いグッドマン・ブラウン」。『ナサニエル・ホーソーン短編全集 I』。東京：南雲堂、1994。pp. 335-54。

----。「イーサン・ブランド—完成に至らざる伝奇物語からの一章」。『ナサニエル・ホーソーン短編全集 III』。東京：南雲堂、2015。pp. 465-86。

Kristeva, Julia. 原田邦夫 訳。『詩的言語の革命 第一部 理論的前提』。東京：勁草書房、1991。

斎藤亜矢。「『美しい』と『怖い』」。『図書』829(東京：岩波書店、2018.2)：44-47。

- 酒本雅之。『ホーソーン—陰画世界への旅』。東京：冬樹社、1977。
- 佐藤泰正 編。『文学における笑い』（梅光女学院大学公開講座論集 第1集）。東京：笠間書院、1977。
- 志水彰・角辻豊・中村真。『人はなぜ笑うのか—笑いの精神生理学』。東京：講談社、1994。
- Storr, Anthony. *Solitude*. 吉野要 監修、三上晋之介 訳。『孤独—自己への回帰』。東京：創元社、1999。
- Duvignaud, Jean. 利光哲夫 訳。『笑いのたくらみ—喜劇性と滑稽さの博物誌』。東京：東海大学出版会、1993。
- 成田雅彦・西谷拓哉・高尾直知 編。『ホーソーンの文学的遺産—ロマンスと歴史の変貌』。東京：開文社、2016。
- Berger, Peter L. 森下伸也 訳。『癒しとしての笑い—ピーター・バーガーのユーモア論』。東京：新曜社、1999。
- Bakhtin, Mikhail. 望月哲夫・鈴木純一 訳。『ドストエフスキーの詩学』。東京：筑摩書房、1995（ちくま学芸文庫）。
- Bergson, Henri. 林達夫 訳。『笑い』。東京：岩波書店、1976（岩波文庫）。
- Hawthorne, Nathaniel. “Ethan Brand.” William Charvat et al eds. *The Snow-Image and Uncollected Tales*. Ohio: Ohio State Univ. Press, 1974. pp. 83-102.
- . “Wakefield.” Nina Baym et al eds. *The Norton Anthology of American Literature, Fourth Edition*, Volume 1. New York: Norton, 1994. pp. 1215-20.
- . “My Kinsman, Major Molineux.” Nina Baym et al eds. *The Norton Anthology of American Literature, Fourth Edition*, Volume 1. New York: Norton, 1994. pp. 1173-86.
- . “Young Goodman Brown.” Nina Baym et al eds. *The Norton Anthology of American Literature, Fourth Edition*, Volume 1. New York: Norton, 1994. pp. 1198-1207.
- Martin, Terence. *Nathaniel Hawthorne*. Boston: Twayne Publishers, 1965.
- 山口昌男 監修。『反構造としての笑い—破壊と再生のプログラム』。東京：NTT出版、1993。
- Reynolds, David S. *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville*. Cambridge: Harvard U.P., 1988.
- 若竹千佐子。『おらおらでひとりいぐも』。東京：河出書房新社、2017。

